愛知教育大学研究報告，51（教育科学編），pp. 37～42, March, 2002

思春期の子どもをもつ父親としての教育意識の高さと子どもの発達との関係

中野靖彦*　　坂下憲司**
Yasuhiko NAKANO　Kenji SAKASITA

*学校教育講座
**小牧市立光ヶ丘中学校

〈問題・目的〉

児童虐待・少年非行などの教育問題が発生し，父親が育児や子どもの教育に参加することを求められる時代となった。実際，諸外国と比べて，父親が子どもと接触する時間は短い(総務庁，1999)。とはいえ，父親が教育意識を高くもつことが，自身とその子どもにどのような効果をもたらすのかは，あまり明らかになっていない。また，日本において父親に関する心理学研究が始まったのは，1980年代と歴史的に浅いうえ，父親自身から得たデータに基づく学会誌論文も少ない（大野・柏木，1997)。そこで，思春期の子どもとその父親を対象に，教育意識の高い父親の特徴および父親の教育意識の高さと子どもの発達の関係を調べることを本研究のねらいとする。

なお，ここでいう「父親の教育意識」とは，子どもの進学を重視する意識ではなく，思春期を迎えた子をもつ父親としての出番に関する意識を示す。

研究Ⅰ

【予備調査1】

〈目的〉

本調査で使用する思春期の子をもつ父親としての教育意識（Education Mindedness,「EM」と略）測定尺度の作成。

〈方法〉

［被験者］小学6年生或いは中学3年生の子ども（男子37人，女子39人）をもつ父親76人。

［調査時期］1999年6月上旬。

［質問紙］父親に対して“自分の子どもの教育に関して，あなたはどの程度父親の出番だと思うか。”という質問を行い，4件法で回答を求めた。質問10項目は，福武書店教育研究所「モノグラフ小学生ナウ」vol. 11-12（1992）を参考にした。

〈結果〉

因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行い，「学習・進路」「学校行事」「ふれあい」の3因子を抽出。項目は，「学習・進路」4項目，「学校行事」と「ふれあい」各3項目の計10項目（0.4以上の負荷のもの）をそのまま採択して質問紙を作成。

【予備調査2】

〈目的〉

本調査で使用する父親の教育参加（Educational Participation，以下「EP」と略）尺度の作成。

〈方法〉

［被験者］［調査時期］予備調査1と同じ。

［質問紙］教育参加（EP）を行っているかについて，EP尺度6項目を設定し，父親に3件法でたずねた。質問6項目は福武書店教育研究所「モノグラフ小学生ナウ」vol.10-7（1990）を参考にし，父親への質問に適するように言葉を直して作成した。

〈結果〉

因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行い，「自分の子どもに関すること」と「地域社会に関わること」の2因子を抽出。各3項目の計6項目（0.4以上の負荷のもの)をそのまま採択して質問紙を作成した。

【本調査】

「教育意識の高い父親に見られるおもな特徴」を明らかにすること。

1　父親の教育意識を高める諸要因の分析

〈目的〉

仮説「父親自身の年齢や子どもの性別・学齢は，父親の教育意識の高さを上下させる要因となるであろう」の検証。

〈方法〉

［被験者］K市にある3つの小学校6年生296人と2つの中学校3年生366人の父親。回収率は79.9%。

［調査時期］1999年9月中旬～10月上旬

［質問紙］EM尺度は予備調査1で作成した10項目。

［手続き］学級担任から質問紙が配布され，子どもが質問紙を家庭に持ち帰り，数日後封緘で回収した。

〈結果〉

(1)　高EM・低EMの得点化方法

EM尺度10項目の回答を得点化したのち，4方位分散で上位群142人を教育意識の高い父親「高EM」，下位群149人を教育意識の低い父親「低EM」と定義した。

(2)　父親の年齢と父親の教育意識の関係

父親の年齢と父親の教育意識の高さについて，分散

分析を行ったところ，父親の年代による有意差が見られた（$F_{(2,291)}=4.5$, $p<.05$）（表1）。

表1　父親の年齢による父親の教育意識の高さの平均

（　）は SD

30代以下 (N=55)	40代 (N=209)	50代 (N=27)	全体 (N=291)
17.7 (7.2)	17.0 (6.7)	15.8 (6.8)	17.0 (6.8)

(3)　子の性差と父親の教育意識の関係

子の性差と父親の教育意識の高さについて，分散分析を行ったところ，子の性差による有意差は見られなかった（$F_{(1,291)}=.40$, NS.）。

(4)　子の学齢と父親の教育意識の関係

子の学齢と父親の教育意識の高さについて，分散分析を行ったところ，子の学齢による有意差が見られた（$F_{(1,291)}=3.99$, $p<.05$）（表2）。

表2　子の学齢による父親の教育意識の高さの平均

（　）は SD

小学6年 (N=157)	中学3年 (N=134)	全体 (N=291)
17.8 (7.1)	16.2 (6.4)	17.0 (6.8)

(2)～(4)より，父親の年齢が若いことや子の学齢が低いことは，父親の教育意識を上下させる要因であるが，子の性はその要因とはならないことがわかった。

2　教育意識の高い父親の父評価と父親像

〈目的〉

仮説「教育意識の高い父親は，かつての自分の父親の教育態度から強い影響を受け，高い理想の父親像をもっているだろう」の検証。

〈方法〉

［被験者］K市の3つの小学6年生296人（男子157人，女子139人）と2つの中学3年生366人（男子174人，女子192人），計662人（回収率93.2%）およびその父親。

［調査時期］研究Ⅰ-1と同じ。

［質問紙］父親には，かつての自分の父評価と今の自分の理想とする父親像について，4件法でたずねた。父評価尺度は10項目で，福武書店教育研究所「モノグラフ小学生ナウ」vol.9-2（1989）から引用した。集計の際，父親と子どもとを対応させるためフェイスシートに番号をつけた。

［手続き］質問紙の回答が父親や他からの影響を受けないように，学級担任が質問紙を配布し，子どもは教室で質問紙調査法を実施した。父親は研究Ⅰ-1と同じ。

〈結果〉

高 EM と低 EM がもつ理想の父親像にちがいがあるかどうかを見るためにχ^2検定を行ったところ，10項目中8項目で有意差が見られた（表3）。また，理想の父親像については低 EM の場合，平均0.8点以上の項目が2項目しかなく，高 EM が6項目あったことから高 EM は，低 EM より理想の父親像が高いといえる。

表3　高 EM と低 EM がもつ理想の父親像　（　）は%

「とてもそう思う」と「わりとそう思う」を合わせた人数

質問項目	高EM(N=142)	低EM(N=149)	χ^2値	χ^2検定
きびしい	77(54)	55(37)	8.8	**
仕事熱心	108(76)	102(69)	2.1	NS
頼りになる	139(98)	119(90)	21.7	**
勇気がある	138(97)	111(75)	28.5	**
明るい	137(96)	119(80)	19.0	**
何でもがんばる	133(93)	113(76)	17.7	**
やさしい	125(88)	102(68)	16.2	**
教育熱心	69(49)	28(18)	29.1	**
何でも知っている	119(84)	82(55)	28.2	**
怒りっぽい	31(22)	38(25)	0.5	NS

さらに「教育熱心」について高 EM と低 EM による評価の差をみるためにχ^2検定を行ったところ，有意であった（$\chi^2_{(1)}=4.3$, $p<.05$）。同じく「教育熱心」について高 EM と低 EM の理想のちがいをみるためにχ^2検定を行ったところ，有意であった（$\chi^2_{(1)}=29.1$, $p<.01$）。

したがって，教育意識の高い父親は，かつての自分の父親の教育態度を肯定的に評価し，自身も高い理想の父親像をもっていることがわかった。

3　教育意識の高い父親の夫婦同質化と自身の教育参加

〈目的〉

仮説「教育意識の高い父親は，夫婦の同質化や自身の教育参加が進んでいるだろう」の検証。

〈方法〉

［被験者］［調査時期］［手続き］は研究Ⅰ-2と同じ。

［質問紙］夫婦の同質化は10項目の質問を設け，子どもに5件法でたずねた。質問項目は福武書店教育研究所「モノグラフ小学生ナウ」vol.11-12（1992）から引用。EP尺度は予備調査2で作成した6項目を用いた。

〈結果〉

(1)　高 EM と低 EM の夫婦同質化のちがい

高 EM と低 EM の夫婦同質化のちがいについて，χ^2検定を行ったところ，10%水準で有意差が見られたのは，10項目中2項目しかなかった。

(2)　高 EM と低 EM の教育参加状況

父親の教育参加(EP)を得点化したのち，平均と SD を合わせた数値6点以上の97人（19%，N＝522）を教育参加をよく行っている父「good-EP」，平均から SD を引いた数値1点以下の 108人（21%）をほとんど教育参加を行っていない父「non-EP」と定義した。

そして，教育実践による高 EM と低 EM のちがいについてχ^2検定を行ったところ，表4のように有意差が見られた（$\chi^2_{(2)}=62.5$, $p<.01$）。

よって，(1)・(2)から教育意識の高い父親は，夫婦の同質化が進んでいるとはいえない。しかし，教育意識の高い父親の教育参加は進んでいることがわかった。

表4　good-EP と non-EP 父×高 EM と低 EM の人数

（　）は%

	高 (N=63)	中 (N=86)	低 (N=56)	計 (N=205)
good	50(51.5)	43(44.3)	4(4.1)	97
non	13(12.0)	43(39.8)	52(48.1)	108

4　教育意識の高い父親が得る効力感や満足感

〈目的〉

大野・柏木（1997）によれば，「現在のところ，父親の育児参加の効果については生活者・育児経験者の体験によって語られるにとどまっている」と記され，一般の父親の効力感や満足感に対する実証的なデータは，今後の課題としている。そこで，仮説「教育意識の高い父親は，父親として高い効力感や満足感を得ているだろう」を検証する。

〈方法〉

［被験者］［調査時期］［手続き］は研究Ⅰ-2と同じ。

［質問紙］効力感・満足感の尺度を，父親に対して4件法でたずねた。質問項目は3項目で，樋口大二郎「学校五日制時代の父親の役割」（1995）から引用した。

〈結果〉

父親の効力感・満足感を得点化合計したのち，高 EM と低 EM の得点差を見るために t 検定を行ったところ，有意差が見られた（t (290)＝10.9，p<.01）（表5）。ゆえに，高 EM の方が効力感・満足感得点が高いので，教育意識の高い父親は，子どもとのかかわりから，父親として高い効力感や満足感を得ていることがわかった。

表5　高 EM と低 EM の効力感・満足感得点の t 検定

	高 (N=142)	低 (N=149)
平均	7.2	5.3
SD	1.4	1.6

〈考察〉

研究Ⅰの結果から，次の4つが重要と考えられる。

一つは，父親が子の学齢が低い時期にどれだけかかわりをもてるかである。思春期からいざ子どもとかかわることは難しい。そこで，幼児期・学童期から子どもの活躍場面を見てほめたり，一緒に遊ぶ中で個性をつかんだりして，父子関係の基礎を築くとよい。

二つ目は，父親の年齢が若いほど教育意識は高いので，学校が親教育プログラムを開発・実践し，親教育を進めることが大切である。「学校はいい働き手になる教育はしてきたが，いい親になる教育はしてこなかった」という三沢（2001）の指摘は，重要な意味を持つ。

三つ目として，子どもは教育意識の高い父親を，肯定的に受けとめている。今後多くの父親が，妻や祖父母任せではなく，進んで学校や家庭・地域に姿を見せ，力をつくす時代へと向かうことが期待される。

四つ目は，父親としての意識が実践へと結びつき，実践が効力感や満足感を生むことから，子育ては苦労ではなく，親の生きる楽しみの一つであることを，父親に再認識してもらいたい。

研究Ⅱ

【予備調査】

〈目的〉

本調査で使用する教育における子どもの父親出番期待（Children's Educational Espectation Toward Father，以下「ETF」）測定尺度の作成。

〈方法〉

［被験者］［調査時期］［手続き］研究Ⅰの予備調査1と同じ。

［質問紙］研究Ⅰの予備調査1で使用した質問項目を小中学生の立場から回答できるように一部表現を変え，4件法でたずねた。

〈結果〉

因子分析（主因子法，バリマックス回転）により，EM とは異なったわかれ方で「日ごろのふれあい」「ここぞという時」「人生の節目」の3因子を抽出。項目は，「日ごろのふれあい」4項目，「ここぞという時」と「人生の節目」各3項目の計10項目（0.4以上の負荷のもの）をそのまま採択して質問紙を作成した。

【本調査】

1　父親としての教育意識の高さと子どもの父親に対する期待

〈目的〉

仮説「教育意識の高い父親をもつ子は，父親に対する期待が強いだろう」の検証。

〈方法〉

［被験者］［調査時期］［手続き］研究Ⅰ-2と同じ。40代の父親が約70%で，最も多かった。

［質問紙］ETF 尺度は，予備調査2で作成した10項目。

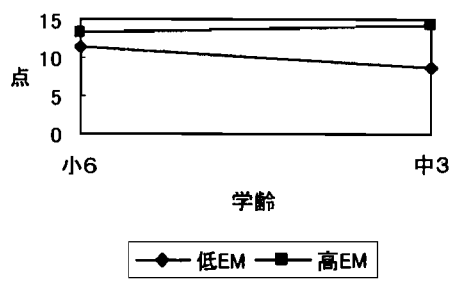
〈結果および考察〉

(1)　ETF の得点化方法

ETF は EM と同様に得点化したところ，平均は11.4（SD7.4）だった。

(2)　教育意識の高い父親をもつ子の ETF と学齢の関係

図1　父親の教育意識のちがいによる学齢別 ETF 得点



父親の教育意識のちがいによる子どもの学齢別ETFについて分散分析を行ったところ，有意差が見られた($F_{(1,291)}=16.6$, $p<.01$)。図1を見ると，高EMをもつ子のETF得点は，学齢が上がってもあまり変化がないのに，低EMをもつ子の場合，学齢が上がるとETF得点は下がることがわかる。

(3) 教育意識の高い父親をもつ子のETFと子の性差の関係

父親の教育意識のちがいによる子の性別ETFについて分散分析を行ったところ，有意であった($F_{(1,291)}=16.5$, $p<.01$)。図2を見ると，高EMをもつ子のETF得点は，男女ともあまり変化がない。だが，低EMの子の場合には，女子においてETF得点が下がることがわかる。

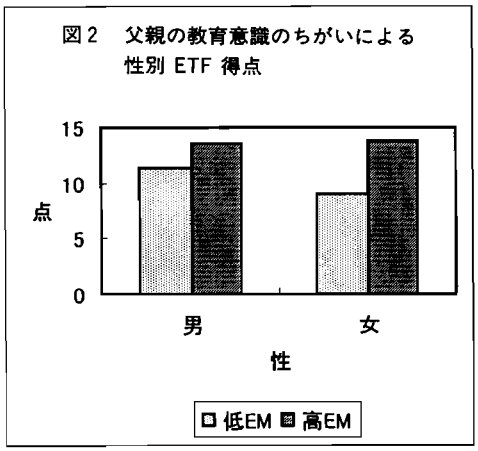


図2 父親の教育意識のちがいによる性別ETF得点

(4) 父親の教育意識のちがいによる子のETFの比較

父親の教育意識のちがいによる子のETF得点について，10の質問項目別にt検定を行ったところ，7項目で有意であった。また，高EMと子のETFの関係を質問項目別に見ると，全般的にEMはETFより得点が高い（図3）。

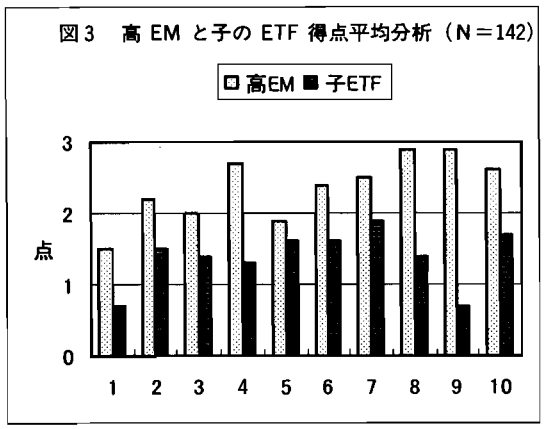


図3 高EMと子のETF得点平均分析（N＝142）

図3中の＊はp<.05，＊＊はp<.01で，高EMをもつ子と低EMをもつ子のETF得点が質問項目別にt検定した結果，有意であったことを示す。

以上(2)・(3)・(4)から，教育意識の高い父親をもつ子は学齢や性差を問わず父親に対する期待が強く，教育意識の高い父親は子の期待に十分応えていることがわかった。

2 二世代にわたる父評価

〈目的〉

林（1996）の「父性の復権」や妙木（1997）の「父親崩壊」は，世代間で父評価が下がっていることを指摘している。しかし，教育意識の高い父親の場合は，現在でも変わることなく，子どもに良い影響を伝えていると考える。そこで，仮説「高EMがかつての父に抱いた父評価と，高EMの子が抱いた現在の父評価は，あまり変わらないだろう」を検証する。

〈方法〉

［被験者］［調査時期］［手続き］研究Ⅰ-2と同じ。

［質問紙］父親には，かつての自分の父評価について，子どもには現在の父評価について，“とてもそう思う”から“ぜんぜん思えない”の4件法で回答を求めた。父親評価尺度は研究Ⅰ-2と同じ10項目で，父親と子どもが対応するよう，フェイスシートに番号をつけた。結果は，「とてもそう思う」と「わりとそう思う」の割合（%）を合計し，項目別に表記した。

〈結果および考察〉

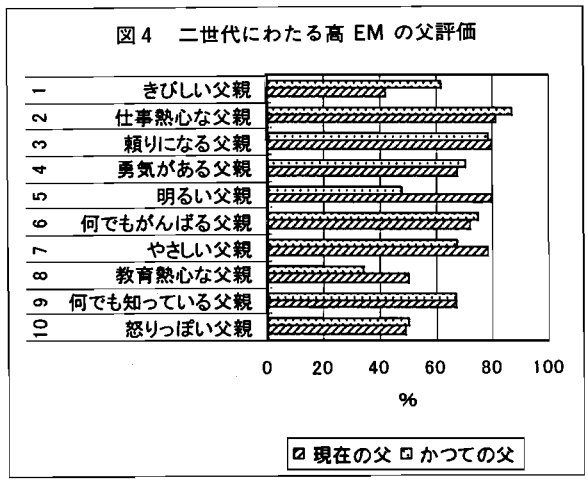


図4 二世代にわたる高EMの父評価

「とてもそう思う」と「わりとそう思う」の合計の割合

図4をみると，教育意識の高い父親のかつての父評価と現在の子どもの父評価を比べたとき「1きびしい父親」と「5明るい父親」以外の8項目に大きな差は見られず，二世代にわたる父親像に変化は小さい。よって，父親としての意識が高い低いにかかわらず，子の父評価の違いは見られない。思春期の子どもは父親を反面教師としてよりもむしろ，ありのままの姿で受けとめているといえる。これは，鯨岡（1998）の「一人の人間の生産過程は巨視的には種の再生産過程である」という指摘に類似しており，大変興味深い。

また，二世代にわたる子どもの父親評価の中で「怒りっぽい」と受けとめている割合の変化が小さいこと

が，注目に値する。現在の父親は，研究Ⅰ-2で見たように「怒りっぽい」を理想に描いていないが，子どもは昔も今も父親はよく怒ると感じている。もし，親子関係が希薄で子どもが怒られた意味を理解していない場合，その効果は薄いので，叱らなければならない時に父親として，きちんとその意図が伝わるようにすることが肝要であろう。塩見（1988）による「確かに昔の父親は厳としていて，…（中略）…尊敬の念で見られてはいたようですが，…（中略）…現在の親子の方が心は通じ合っている」との叙述は重要で，表面ではなく内面のつながりを大切にすべきである。

研究Ⅲ
父親としての教育意識の高さと子どもの社会性・自立性

〈目的〉

仮説「教育意識の高い父親をもつ子どもの社会性と自立性は高いだろう」の検証。

〈方法〉

［被験者］［調査時期］［手続き］については，研究Ⅰ-2と同じ。

［質問紙］社会性尺度は，子どもに対し3件法でたずねた。質問は15項目で，くもん子ども研究所「第1回くもん子ども調査」(1991)から引用した。自立性尺度は，同様に3件法でたずねた。質問は15項目で自主性診断テスト（DTI）尺度を参考にして作成した。

〈結果および考察〉

(1) EMと子の社会性

高EM子と低EM子の社会性得点をt検定したところ，有意差が見られた（$t_{(290)}=4.6$, $p<.01$）（表6）。

表6　高EM子と低EM子の社会性得点のt検定

	高 (N=142)	低 (N=149)
平　均	9.7	8.2
標準偏差	2.8	2.8

(2) EMと子の自立性

高EM子と低EM子の自立性得点をt検定したところ，有意差が見られた（$t_{(290)}=4.0$, $p<.01$）（表7）。

表7　高EM子と低EM子の自立性得点のt検定

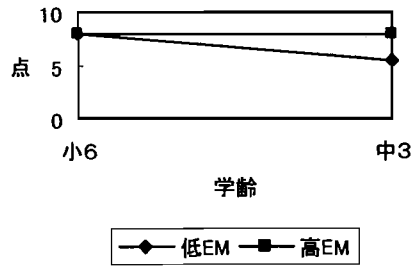
	高 (N=142)	低 (N=149)
平　均	8.2	6.9
標準偏差	2.8	2.8

(3) 子の学齢別自立性得点と父親の教育意識の関係

子の学齢別自立性得点と父親の教育意識の高さについて分散分析を行ったところ，子の学齢のちがいによる有意差が見られた（$F_{(1,291)}=16.4$, $p<.01$）（図5）。

以上(1)・(2)・(3)から，教育意識の低い父親に比べて，教育意識の高い父親をもつ子どもの社会性と自立性は高く，父親の教育意識は思春期の子どもの自立を支えるうえで，重要な役割を担っていることがわかった。特に自立性は，父親の教育意識のちがいが子どもの自立性に大きな影響をもつので，父親が思春期に入った子どもをいかにサポートするかが，重要である。

図5　子どもの学齢別自立性得点×父親の教育意識



今後の課題

子どもの成長・異性モデルイメージや道徳的行動に対する父親の影響についても検証を試みたが，質問回答の中に母親や他者を含むと，父親の影が薄くなる。したがって，今後は父親の影響を主とした質問紙の作成や調査・分析の必要性を感じた。また，教育意識の低い父親について深く追究することが，新たな課題となった。

研究のまとめ

まず，父親の教育参加が求められる現代において，父親の教育意識の高まりは子どもの期待を高め，子どものパーソナリティ発達に良い影響を与える。そして，父親自身も効力感や満足感を得て教育参加を進める。

次に，理想の父親像については，昔ながらの「がんこ親父」や「友達のような父親」は，今の時代に合わない。「一人の人格の中には両面があるもの」ととらえ，父親が優しさと厳しさのバランスをうまく保ちながら子どもとかかわるように心がけるべきである。

また，上寺（1978）の「母子」「父―子」論は示唆に富む。つまり「父―子」の関係は「―(つながり)」が切れることなく結びつき，弾力的であることが望ましい。そのためには，乳幼児期や児童期からの日常生活のふれあいを増やして「―(つながり)」をより太くし，思春期においては子どもが自立への道を探ることができるように支援するとよい。そして，マイナス評価するよりも加点法で自信を深めながら，母親と協同で健全な家族関係を構築することが大切と思われる。

引用・参考文献

大野祥子・柏木惠子　1997　第6章　父親　日本児童研究所編　児童心理学の進歩―1997年版―　pp.123-147　金子書房
上寺久雄　1978　父親の出番―その教育的役割―　黎明書房鯨岡峻　1998　両義性の発達心理学　ミネルヴァ書房
くもん子ども研究所　1991　第1回くもん子ども調査
塩見邦雄　1988　現代の父親像についての一研究　兵庫教育

大学研究紀要
自主性診断テスト（DTI）金子書房
総務庁　1999　第６回世界青年意識調査
林道義　1996　父性の復権　中公新書
樋口大二郎　1995　平成の父親たち　児童心理1995年12月号
臨時増刊　実践読本　父親の子育て　pp.78-86　金子書房
福武書店教育研究所　1989　モノグラフ小学生ナウvol. 9－2
福武書店教育研究所　1990　モノグラフ小学生ナウvol.10－7
福武書店教育研究所　1992　モノグラフ小学生ナウvol.11-12
三沢直子　2001　『社会が担う子育てを』　中日新聞（１月１日）
妙木浩之　1997　父親崩壊　新書館

（平成13年９月10日受理）